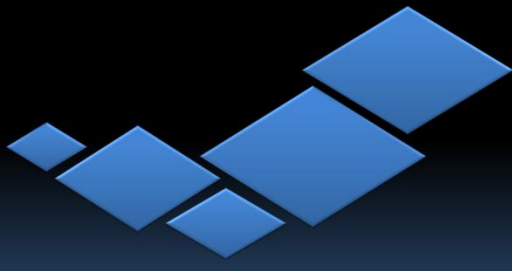




Title	月刊DRF 第54号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2014-07-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73607
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_54.pdf



[Instructions for use](#)



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第54号

No. 54 July, 2014

【特集1】平成26年度第1回学術情報基盤オープンフォーラム 参加レポート

【特集2】Open Repositories 2014 参加レポート

【連載】今そこにあるオープンアクセス 第7回

【特集1】平成26年度第1回学術情報基盤オープンフォーラム

2014年5月29日、標記フォーラムが学術総合センターにて開催されました。「共に考え、共に創る明日の学術情報基盤へ」と題し、盛りだくさんのプログラムでした。主にコンテンツ系のセッションに参加しましたので、内容をご報告します。



イントロダクション会場

Next NII

～学術情報流通を支える人とシステム～

NII准教授の大向氏が、CiNiiのこの1年の動向について発表され、その中でNACSIS-CAT/ILLのオープン化とライセンス明示、電子図書館事業の終了についても言及がありました。

ユーザーからCiNiiへの要望は、博士論文や海外文献、eBookの検索、オープンな電子ジャーナルの所在把握など、CiNiiのこれまでのステータスを超えるものが多いそうです。これらをうけて、SINET5時代のCiNiiは、文献に限らないあらゆる学術情報のインターフェイスという位置づけが明確になること、図書館との連携によるコンテンツキュレーションを志向するとのことでした。

続いて学術基盤推進部次長の尾城氏から、JUSTICEの今後について発表がありました。これまでの成果と、継続する電子ジャーナル経費の増額に触れた後、OA誌の進展に伴い、APC管理が図書館業務に加わってくるであろうこと、学外の学術情報受信から学内の学術情報発信へ図書館の役割が転換するであろうこと、などが述べられ

ました。

OA誌の質の情報提供、APC金額と購読料の交渉、支払い管理などOA誌を通じた発信支援がJUSTICE全体の新しいミッションであり、今後は電子リソース管理システムの共同利用や人材育成が活動の軸になるであろうとのことでした。最後に参加館に向けて、JUSTICEが何をしてくれるかではなく、各参加館がJUSTICEにどう貢献できるか考えてもらいたい、というメッセージがありました。

オープンアクセス・オープンデータ・オープンエデュケーション

この3つのトピックで1セッションが構成されていました。

オープンアクセスについては、NII学術コンテンツ課の相原氏より、平成25年度にSPARC Japan主体で実施したAPC調査^[1]の報告と、千葉大学の杉田氏より、同じく平成25年度に発足した機関リポジトリ推進委員会^[2]の紹介がありました。



セッション会場

APC調査の結果、課題として、適切な価格設定やゴールドOAに対応する研究者・URA・研究支援部門・図書館等の連携強化の必要性が読み取れました。

機関リポジトリ推進委員会については、JAIRO Cloud等リポジトリ基盤の高度化、研究活動の始点からのコンテンツ収集、研究データ等コンテンツ範囲の拡大、それらに対応できる人材育成などが戦略的課題に挙げられ、ワーキンググループ協力員の募集も紹介されました。

NII教授の武田氏からは、研究成果としてのデータ公開進展、Research Data Alliance発足など、オープンデータに関する世界の動向が紹介され、さらに機関リポジトリの拡張として、データリポジトリの可能性が提示されました[3]。

続いてNII学術コンテンツ課の片岡氏から、大学が展開するOCW等での公開教材について、現状の整理と九州大学の事例紹介がありました。e-ラーニング教材やOCW搭載の教材は、担当部署がまちまちな現状があります。九州大学では、e-ラーニング教材のメタデータ管理を附属図書館へ統合、業務システムの管理へ組みこんだとのことでした。

図書館にはデータ管理のノウハウと、事業の継続性の裏づけがあり、オープンアクセス・オープンデータとオープンエデュケーションを合わせ、3つのオープン化集約[4]に取り組むべきではないか、という呼びかけで締めくくられました。

JAIRO Cloud の描く未来

3セッション目はJAIRO Cloudについて、概要、既構築機関からの移行実験、コミュニティの現状と展望が紹介されました。NII学術コンテンツ課の高橋氏からの概要説明にあった、JAIRO CloudのメリットであるSCPJ連携、ROAT相当機能の実装予定、コンテンツへのDOI登録に個人的に関心を持ちました。

筑波大学の真中氏からの移行実験報告では、移行作業の経過とつまづいた点、移行して得られたメリットなど、具体的な紹介があり参考になりました。

NII学術コンテンツ課の前田氏のコミュニティ紹介では、情報共有、担当者育成、将来へのアイデア共有などコミュニティが担う役割が述べ

られ、特にJAIRO Cloudは参加機関が同一システムを使用しているためコミュニティが機能しやすいと指摘されました。秋にユーザー会の計画があること、将来はコミュニティベースの運用体制が考えられるとのことでした。



パネルディスカッション

最後に全体のパネルディスカッションがあり、SINET5の構築に向けて、ネットワーク・クラウド・コンテンツ・人材育成・産業界からの視点など、さまざまな論点で議論が交わされました。

全体を通して、NIIと関係各機関が、提供者と利用者という2者関係でなく協働関係であるためにはどうすべきか、というフォーラムのテーマが貫かれており、できることを共に考え実行していかなければならないと改めて考える機会になりました。

イントロダクションから各セッションまで興味深い内容で、セッションはサテライト会場が用意されるほど盛況でした。フォーラムWebサイト[5]から講演資料が公開されているのでぜひご覧ください。

レポート：小村愛美（神戸大学）

- [1] <http://www.nii.ac.jp/sparc/apc/index.html>
- [2] <https://ir-suishin.repo.nii.ac.jp/>
- [3] 研究データの共有は、5月のOpenAIRE-COAR 2014 Conferenceでもキーワードの1つに挙がっている。月刊DRF No.53参照
- [4] この3点の集約はSPARCの課題にも挙がっている事項。月刊DRF No.51参照
- [5] <http://www.nii.ac.jp/csi/openforum2014/>

【特集2】 Open Repositories 2014

June 9.-13. Helsinki, Finland

2014年6月9日から13日にかけて、フィンランドのヘルシンキで、リポジトリやオープンデータなどをテーマとした国際会議Open Repositories 2014が開催されました。参加された3名の方にレポートをしていただきました。

[Open Repositories 2014のサイトはこちら](#)

OR2014参加レポート

林正治(一橋大学)

今回のOR2014が初めてのORとなります(6/9から6/12午前までの参加)。初参加者として印象に残ったことを報告します。

強力なデベロッパーコミュニティ

今回OR2014に参加して一番に感じたことは、リポジトリソフトウェアに関するデベロッパーコミュニティがとても活発であることです。彼らからは、あらたな機能をもったリポジトリソフトウェアを作ってやろうという意気込みが非常に強く伝わってきました。

初日は「Introduction to Hydra for Developers」「Implementing RDF metadata in Hydra」というHydraプロジェクト主催のワークショップに参加したのですが、最新の開発技法、技術を用いた彼らのソフトウェアをみて、国内の状況との違いに正直驚きました。本会議でもHydraを利用した発表が数多く見られ、コミュニティの勢いが感じられました。

私は正直、リポジトリソフトウェアは枯れた技術の集まりと考えていたのですが、実はそうではないことを強く思い知らされました。国内においても、リポジトリソフトウェアに関するデベロッパーコミュニティが盛り上がり、楽しいだろうなと本気で思いました(もし既にあるようでしたら是非教えて下さい)。

複数機関による連携プロジェクト

次に印象に残ったのは、データリポジトリや研究データの長期保存に向けた取り組みを複数機関が連携して実現を目指しているところです。個々の機関が持つ予算や人材には限度がありますが、同じ目的のもと複数の機関が集まり、困難な課題に取り組んでいました。前述のHydraプロジェクトや研究データ長期保存のためのネットワークDigital Preservation Network(DPN)も複数機関・複数プロジェクトによる取り組みです。また、企業による強力なバックアップ体制の存在も印象的でした。

データリポジトリのSaaS企業展示ブースで見たfigshareによる研究機関向けリポジトリサービスも印



メイン会場

象的でした。実際のデモを見させてもらったのですが、データ専門誌「Scientific Data」の推奨データリポジトリの一つとして取り上げられているだけあって、機能的によくまとまっていた。個人ページやグループページも存在し、特定の研究グループ内の研究データを共有する仕組みもありますし、研究データのバージョン管理機能も備えていました。ユーザ認証については、機関ごとの要望に応えるとのことで、基本はカスタマイズということでしたが、Shibbolethの実績等はあるようでした。研究データを国外のクラウドに載せることには様々な抵抗がありそうですが、アクセスコントロールさえしっかりしていれば、個人的にはSaaSという選択肢も有るのかなと思いました。国内ではJAIR Cloudと学認の仕組みが存在しているので、日本版データリポジトリSaaSの下地はできつつあるのかなと勝手に考えています。

OR2014は会期が夏至ちかくの時期だったので、1日がながく、少し得した気分で会議に参加することができました。来年度も是非参加できればと思っています。

写真撮影: 林正治氏(3枚とも)



大聖堂前
(ヘルシンキ・デイ(6/12)にむけて準備中)

OR2014

Open Repositories 2014に参加して

行木孝夫(北海道大学)

残念ながら10日から12日までの参加でしたので、その中から抜粋します。本会議は並列に3セッションが進みました。

Keynote and discussion

ラテンアメリカの機関リポジトリは9カ国、100を超えて着実に成長している。メキシコでは19万件以上のコンテンツ。OAの重要性を高等教育のキーパーソンに訴えもした。メキシコの研究機関で義務化したところは2カ所ある。一方で有力誌をコストの面から購読できない。教育的見地からは購読できない有力誌へ投稿したくないのだが、特に若手には問題が多い。OAに興味がある。同様に、研究データをopenにすることも重要で、それにはどうやって研究文化を変え、共有するかが問題である。

OA誌の質という問題もあって、インパクトファクターだけならOA誌でも十分である。査読過程の質もOA誌だから悪いというわけでもない。若手のキャリアも、研究そのものを評価することで解決になるはずである。

高等教育におけるOAの役割は、有力誌を購読できない機関の多い地域では特に、若者、学生や若手研究者にとって重要となっている。プロジェクトを運営していて、毎日Pay per Viewで読んでよいか聞かれるようではフラストレーションでしかない。若者の未来を開くためにOAが必要。

Integrating open articles with open data in the life sciences with Europe PubMed Central

Europe PubMed Central は、2800万件のアブストラクト、300万件の Creative Commonsベースのフルテキストを保持しており、価値付与サービスとして論文内の成果に関連するデータおよびデータに関するデータベースと統合している。同時に引用数、競争的資金、ORCID、セマンティックなアノテーションをサポートしている。

膨大なライフサイエンス系データ、データベースに対応するためには引用可能な形でデータが整備され

ている必要がある。アクセスが保証され、識別子が付与されていなければならない。

論文とデータの統合のために、オントロジー、accession numbers、doiを必要とする。deep indexingで論文からデータへのリンクを実現する。データへのリンクは、doiなどを通じて発見されやすさを増す。外部リンク、APIの詳細は europepmc.org/LabsLink を参照。データとしては、遺伝子配列、数理モデルなど。これらを実現することで、分野横断的なデータベース統合、知識統合の一例ともなっている。

Interlinking IR and Europe PMC

機関リポジトリ側は PMID で metadata を PubMed や PMC/Europe から取得できる。PMC/Europe 側では、データの格納先の一つとして機関リポジトリを利用する。

HyberActive

リンク切れ、ウェブリソースの消失問題は深刻で、例えば OR2006 のページは既にロストしている。その一方で web archive 版は残っている。論文がウェブリソースをリンクする件数は増大する一途にも関わらず、リンク切れでアーカイブもされていない場合、リンク先のコンテンツを失っているケースは極めて高い。上位1%のインパクトファクター誌の論文中で10%のリンクが出版後15ヵ月で切れている統計がある。

これを解決する方策の一つは、リンク先を何らかの形で保存することである (Hyberlink's zotero extension として実装)。リポジトリがコンテンツ内リンク先のアーカイブをサポートすることで価値付与サービスとして展開できる (既存の pro-active アーカイブ基盤を利用)。

実装としては、XMLベースのマークアップで論文内リンクを記述、HyberActive 側で展開して、web archive へリクエストする。web archive 側では URL の変化を発見したらリポジトリへ通知、リポジトリ側では URL を修正する。ドキュメントとは何か、という問題も提起していると思われる。

A Model for Integrating the Publication and Preservation of Journal Archives

Journal Preservationの問題は難しい。Library based publishingとして、43のacademic libraryがpublishing serviceを提供している。Open Journal Systems(OJS)、DSpace、Digital Commons(DC)、特にOJSとDCが一般的なプラットフォームである。ところで、コンテンツは単なるbitstreamでよいのだろうか。フォーマットの変化、機械可読性という問題がある。

Hathi Trustは研究図書館の連携である。preservation qualityを満たすデジタルリポジトリとして、1100万件以上のコンテンツを保持し、50TBのデータに相当する。preservation-qualityとして、結局はマークアップでフルテキストを記述するしかない。JATS(NLM-DTD)を使う。TIFF、JPEG2000をビットマップベースの場合に採用。METSをメタデータの



ポスターセッションの様子

preservationに利用する。mPatchなるモジュール化プラットフォームを開発し、Hathi Trustと密接に連携。

OR2014参加報告

前田朗 (国立情報学研究所)

今回参加した目的は、国立情報学研究所(NII)の機関リポジトリ支援事業について海外に情報を発信すること、そして海外の動向について情報を収集してくることです。

NIIからの情報発信

NIIの機関リポジトリ事業についての発表はポスター発表として採択されました。発表タイトルは、“Institutional Repository Ecosystem in Japan: IRDB and JAIRO Cloud”です。日本の機関リポジトリとその連携システムとの関係性を示し、その中でNIIのIRDB(JAIRO)とJAIRO Cloudが果たしている役割を表したものです。

日本の多くの機関リポジトリはNIIのIRDBを通して、外部システムと連携しています。いま連携を進めている国立国会図書館の学位論文電子納本と、ジャパンリンクセンターのDOI登録のシステムは、機関リポジトリの必要性和有用性を高めるものです。JAIRO Cloudは、機関リポジトリの必要性向上に対応するだけでなく、外部システム連携のための機能の強化を行うことで、外部システム連携を促進する役割を果たしています。

ポスター発表では、Minute Madnessという1分間の口頭発表と、Poster Receptionというポスター前での質疑応答の機会が与えられます。私もこの場で、できるだけのアピールをしてみました。

Open Repositoriesについて

“Open Repositories 2014”では、いくつかの面白い取り組みをみかけました。今回が初と思われる“Repository Rant”は、リポジトリに関する意見(“rant”

は「大言壮語」のこと)を述べるセッションです。また、例年ですが、“Developer Challenge”というアプリケーション開発コンテストがあります。これは参加者がチームをつくって、会期中にアプリケーションを企画・開発するものです。DSpaceのシステム情報を確認できる、Analyze your repository (<http://dSPACEcheck-atmire.rhcloud.com>)など、リポジトリに関する面白いアイデアをいくつも見る事ができました。

“Open Repositories 2014”の主観的な感触ですが、“Reuse”という語がよく目に留まりました。これは、メタデータの流通による再利用、リポジトリシステムの流用、研究データの再利用、それぞれの文脈で出てきたものです。

メタデータの流通に関しては、“Repository Junction Broker”という出版社等からデータを受け取り、それを機関リポジトリに配信するサービスが示されました。また、IRUS-UKという、個々のリポジトリやAggregatorをとりまとめて利用統計をとるサービスが紹介されました。

リポジトリシステムの流用としては、特殊コレクション用として、DSpaceの技術を使ったSkyLight IIと、FedoraをベースにしたSpotlightが紹介されました。

研究データの再利用については、データキュレーションにおけるデータレビューの演習にて、データの再利用の重要性について言及がなされています。

それ以外にも、Islandora、Hydra、Invenioといった、日本ではメジャーではないリポジトリシステムについての動向や、音声データや地図データといった文献以外のデータリポジトリについての紹介、DOIやORCIDの活用など、海外におけるリポジトリ事業の盛り上がりを体感して行く事ができました。

今そこにあるオープンアクセス 第7回

Clear and present Open Access

栗山正光

首都大学東京学術情報基盤センター教授
デジタルリポジトリ連合アドバイザー

【ReaD & Researchmap】

<http://researchmap.jp/read0195462>



エンバーゴなんかこわくない Who's afraid of embargoes?

5月末、アメリカ図書館協会大学図書館部会が運営する学術コミュニケーションに関するメーリングリストACRL Scholarly Communication (SCHOLCOMM)に、突如、投稿が集中した。きっかけとなったのは、日本でも多く採用されているリポジトリ・ソフトDSpaceに「コピー請求ボタン(Request-Copy Button)」機能が追加された、というスティーヴン・ハーナッドの投稿である。

この機能は日本ではなじみが薄く、ピンと来ない方も多いと思われるので、その使い方についてまず説明する。周知のとおり、多くの学術雑誌は購読者離れを防ぐため、雑誌発行後一定期間、掲載論文の原稿を著者がインターネットで公開することを禁止している。これをエンバーゴ (embargo)という。しかし、エンバーゴ期間中であっても、著者が他の研究者の求めに応じて個人的に電子メール等で原稿を贈呈することまでは禁じられていない。「コピー請求ボタン」はこの手順を省力化する仕組みである。具体的には、リポジトリを検索して見つかった論文が非公開であれば、書誌データの脇にこのボタンが表示される。これを押して自分のメールアドレスを入力すると、著者に通知が行く。著者が通知メッセージに対してOKを出せば、リポジトリ中の非公開原稿(の入手先)が当該メールアドレスに自動的に送付される。いわばエンバーゴの抜け道である。

ハーナッドは以前から、この機能を活用することで「ほぼOA」が実現できるので、エンバーゴが設定されている雑誌の論文も掲載が決まったらすぐにリポジトリに登載する(もちろん本文は非公開で)よう義務付けるべきだと繰り返し主張している。今回の投稿もその延長線上にあり、GOAL、JISC-REPOSITORIESな

ど他のメーリングリストにも同じメッセージが出されている。

これに対して、クラウス・グラフ(Klaus Graf)というドイツの歴史家・アーキビストがかみついた。何度も言っているようにこのボタンはOAとは何の関係もない。間違ったアプローチである。学者を物乞いにする。機能しない、つまり著者は原稿を送ってこない。といった具合に挑発的な批判を展開し、議論に突入する。

「何度も言っている」とあるように、この問題をめぐるハーナッドとグラフの論争はこれが初めてではない。GOALの前身、American Scientist Open Access Forumというメーリングリストで、2010年1月末から、すでに同じような議論がなされているのである。当時はハーナッドが管理人を務めていたのだが、個人攻撃も交えたグラフの暴走ぶりにたまりかねて、彼に対して強制退会措置を取っている(12年間の歴史のうちで初めてのこと)。

グラフによれば、このボタンは著者に人を選んで請求を拒否する権利を与え、平等なアクセスを保証しない。また、エンバーゴが設定されているもの以外にも利用でき、ダーク・デポジットを助長する邪悪な道具であると言う。そして、実際、ハーナッド流の義務化を実践していることで有名なリエージュ大学のリポジトリORBi中には、エンバーゴ期間を過ぎても非公開のものがいくつもあると実例をあげて非難する。

しかし、このようなOA原理主義とでも呼ぶべき主張は、エンバーゴの存在を前提に「コピー請求ボタン」の活用を呼びかけるハーナッドら現実主義者に受け入れられるはずもなく、最後は無視される形となった。論戦は6月を待たずに終息した。

次号
予告

【特集】 いまから準備！ Open Access Week のススメ

【連載】 かたつむりとオープンアクセスの日常

読者アンケートにご協力ください。

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html



<http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。 gekkandrf@gmail.com

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/> 月刊DRF第54号 平成26年7月1日発行 デジタルリポジトリ連合

